

南方（その他）

パレンバン石油部隊の追想

神奈川県 小倉 彰

インドネシアには昔から「インドネシアを救う神は天から来る」という言い伝えがあった。その通りに神兵が空から降りて来たのだから彼等の日本に対する協力振りは献身的であった。

落下傘部隊のある隊員が、あんな小人数であるの急襲によくも成功したものと述懐しておられたそうだが、その部隊は、日本を出る前に日石横浜製油所で製油所の攻略演習をして来た程の部隊であるから、高い計画性とその精鋭さは勿論であるが、現地人の協力も

見のがす訳にはいかない。

わが石油部隊にしても僅かの人数で膨大な地域に広がる油田地帯、または精巧かつ雄大な製油所の復旧から生産活動まで順調に遂行出来、所期の目的を達成出来たのも彼等現地人の協力の賜であった。

昭和十六年八月一日のアメリカの対日石油輸出禁止によつて日本の石油類の需給計画は暗礁に乗り上げ、軍需で約二カ年、民需約半年の乏しい貯油しか持たない状態に追い込まれてしまった。

そのため、石油資源確保が必要となり、南方の製油所の占領が開始された。

私は、南スマトラ・パレンバンの石油地帯の攻略に参加した。仏印サイゴンで一カ月の攻撃準備をした後、部隊本部と作井第五中隊は「タコマ丸」で、二月十日

カムラン湾を出港した。海域にはシンガポール脱出中撃沈された敵方非戦闘員が漂流していたが、そんな中を南下した。

十四日、バンカム島ムントク沖に集結。戦闘部隊は上陸用舟艇に移乗し、十六日夕刻、プランジュー棧橋に上陸した。本隊はそのままムシ河を溯江した。

その日、ムシ河口において蘭軍の空襲を二度受け、第三船の「但馬丸」は直撃弾を受け戦列を離れたが人員に損傷なく、十七日夕、プラジュー製油所に上陸占領した。

プラジュー地区では、リマウ油田群、アバブ油田群、ダワス油田群を占領。三月十一日、長駆パレンバン北方三〇〇キロのジャンピー油田群を無血占領し、第一次作戦を成功裡に完結させた。

各油田共、動力施設、送油所パイプライン等は徹底的に破壊され、各油井はチューピング、鉄片、スパナ、セメント等が油井内に投入され、採油不能の状態であった。なかでも敵側が破壊し得なかったタランジマル十二号井には放火され、黒煙は天に達し、五〇〇六〇

キロ遠くからもその煙を望見することができた。作井第五中隊の立川隊が八〇余日に涉り火炎と苦闘し、五月上旬ようやく完全消化に成功した。

かくて四月上旬に至り製油所の復旧がなり、運転要員として内地の陸軍燃料廠から十川少佐、京都中尉、地福中尉等と、日石横浜製油所より、笠原所長、小倉、今津、小出、塚原氏などが陸統と着任、四月二十日にはプラジュー製油所（以下第一製油所という）のトッピングの火入式を行い待望の航空揮発性（オクタン価八七）の製造に成功した。

各油田の方も復旧作業が急ピッチで進められ、第一鉱業所からは五月二日、プラジューに向けて送油を開始した。ここタランジマル原油は、凝固点三五度以上であるため常夏の国でも取扱は容易でなく、九〇キロに及ぶパイプラインの途中に四カ所のヒーターイングプラントを設け、五〇度以上に熱してポンプ輸送をした。以上のごとく、永幡部隊（第三野戦兵器廠・採油隊）は徴用作業員は勿論、現地労務者に至るまで火の玉となって復旧作業に任じた。五月十日、南方燃料廠が編

成され、業務は永幡部隊から南スマトラ支廠に引き継がれることになった。

前述したように、石油資源の確保を主目的とする南方油田占領作戦は予期以上の成果をおさめた。その占領地域の石油資源の分布は北ボルネオ、南・北スマトラ、ジャワにわたり、西は作戦行動実施中のビルマを含んでいる。

所管の軍も、スマトラの第二十五軍、ジャワの第十六軍、ビルマの第十五軍となっていた。

南スマトラおよびジャワの石油資源は第十六軍の権限内に入るということで、第十六軍参謀部には帝国石油・内田、北野、商工省・吉田、松下、東亜燃料鉱業・南部、日本石油の林、若木、三菱石油の玉置、塚原氏等が囑託として配属され、その内パレンバン製油所には北野、林、玉置氏。パレンバン市の政務関係として三菱商事の宮地氏等が台湾高雄から分遣された。

その後、陸軍占領地域の石油行政の統轄方式は、占領直後に現地出張をした当時の陸軍省燃料課長中村儀十郎大佐の構想と、総軍参謀部との意見一致により南

方燃料廠が誕生を見るに至ったのだという。

そして初代の南方燃料廠長に当時陸軍省の整備局長であった山田清一少将が任せられた。

山田整備局長は物的戦力の総元締たる立場から、日米開戦を決定する最後の省内の局長会議で、東条陸相に対し、開戦反対意見を敢然として主張したと伝えられている。

以上のような経過で、五月十日南方燃料廠は、南方総軍直轄部隊として、昭南（シンガポール）に設置された。

戦争の激化とともに、敵潜水艦および航空機によるタンカーの損害が目立って増加してきた。

各鉱業所製油所は生産よりも、タンクおよび重要施設（動力など）の防護壁構築のため、セメント、煉瓦など資材と労務者、輸送力（トラック、船舶など）等が必要になって来た。

かかる状況下で、南スマトラ地区では重要施設の防護工事と、ムシ河口の敵機による魚雷封鎖に対し非常搬出施設として、パニユアシンの非常積出施設建造の

難工事が内田作業隊によって進められた。

またボルネオに新製油所建設の計画が立案されたが、船舶輸送は極度に悪化し、シンガポールから建設資材を輸送するにも棧帆船によるほかはなく、戦局の進展に間に合うスピードで大製油所を建設することは誰の目にも不可能なものと見られていた。安全と思われていた同地区はビルマに次ぎ最初に敵地上部隊の攻撃を受けるに至った。

そのような状況下、パレンバンは初空襲に見舞われた。即ち昭和十九年八月十一日払暁、パレンバン製油所は敵の初空襲を受けた。午前三時から七時まで約四回にわたり、B 24延二〇機が、高度二、〇〇〇―三、〇〇〇メートルで来襲、爆弾約四〇発、焼夷弾約一〇〇発を投下した。第一製油所K二〇番タンクが発火炎上したが翌十二日には消火し、被害は軽少であった。

しかし、第二、第三次の空襲により次のごとき被害が出てしまった。

二十年一月二十四日十時十分、敵艦載機約一〇〇機

(英極東艦隊所屬)が来襲、第一製油所に爆弾一〇〇発を投下した。約十箇所から同時に発火し、製油所は火の海と化した。発電所、分解および改質装置、原油蒸留装置が大破した。死傷者は日本人、現地人合わせて一〇〇名に達したが、笠原隊長の適切なる消火指揮で、翌二十五日九時四五分完全鎮火した。

同月二十九日十時三十分、敵艦載機約一二〇機が第二製油所に来襲、投弾約一〇〇発、各製油施設、タンクは火に包まれ、そのホテリで五〇メートル以内には楯なしには近接できぬ状況になった。しかし鋭意消火に努めた結果、二〇八番タンク一基を残して日没までに鎮火させた。製油施設の被害は甚大であり、日本人、現地人併せて約二〇〇名の死傷者を出した。五〇〇キロ爆弾の直撃を受けたことにより、三〇センチの防護壁は根本からフツ飛んでしまった。

二〇八番タンクの火勢はなかなか衰えず、翌々三十一日二十二時十分、発火後六〇時間を経て鎮火させた。

第一製油所も、第二製油所も、火の海に覆われ全滅かと思われたが、被害調査の結果、約一カ月で応急復

旧が可能、製油能力も五〇%回復できる見込みを立てることができた。

三月三十一日、シンガポールの石油中継基地、ブクム、サンブー貯油所が徹底的な爆撃を受け、完全に機能を停止。南方地域は完全に敵機の制空圏内に入り、石油の補給は小型船によるいわゆる蟻輸送によらざるを得なくなった。

パレンバン製油所が、三回の本格的空襲を受けながら、不屈の大和魂でダルマのように七転び八起きし、処理能力の五〇%を保持し得たことの要因は、

一、施設に対する防衛工事が完璧に近く実施されていたこと

二、敵弾下で製油施設の緊急運転制御が適確に行われたこと

三、消火活動が敏速機敏且つ適切に行われた結果であらう。

パレンバンの石油人たちが生命をかけて復旧し守りつづけた設備も、敵の制空下に撤出路をズタズタに切られ活用するすべもなくなり、敵の空襲に備えて最後

まで燃料の補給を維持するためにジャングル内に簡易製油所を建設した。これを戦陣製油所と称した。

このような戦況の悪化の中、終戦を迎えたのだが、南スマトラ燃料工廠の復員名簿によれば、終戦時の人員は、将校三一九名、准士官・下士官二三九名、兵三八六名、軍属一五八七名、合計二五三一名である。

終戦後の石油部隊

それにしても思い出すのは復旧完了後、私の撮った比較写真、即ち復旧の前後の写真を同じ場所から撮って比較した十数枚の写真が献上写真になったことである。あの写真が今残っておれば良い記念になったであろう。

敗戦後の現地従業員の我々に対する協力ぶりは特記すべきものがある。あの膨大な書類を必要とした敵産返還即ち終戦処理が無事に遂行出来たのも彼等の協力のおかげであった。誰もあまり気付いていないようだが、もしあの時、製油所の発電所が停止してしまっただとしたならば、電気、水道が全て止まってしまうので大変なことになったことであらう。このように戦中戦

後を通じ製油所従業員の好意的協力は変らなかつた。

日本軍の進駐と同時に「ジャワに逃亡していた製油所技術者を送還し来り、製油所の復旧に協力せしめよ」との命令があつたが、私はインドネシアの協力がある限り敵性人を使うことはかえつて何かとトラブルのものになるのでお断りして、杜宅の片隅に収容して翻訳業務にのみ使つた。

このことは後に非常に重要なことであつた。サバンの島のブラックキャンプで聞いたところであるが、終戦直後は日本人が捕虜を殴つたというだけで死刑になつたそうである。血の気の多い若者の多かつたこととて無事には済まなかつたであらう。

占領軍の進駐はスローペースで運ばれた。むしろ日本側に多少あせりの色が見えた。パガララムまたはワイリマ地区への自活のため移動などあつたが、これが多少心のゆとりが出来たようにも思われた。占領軍の進駐は、先ず最初が調査団として将校団が来たが、矢継早にいろいろな調査のための命令が出された。続いて十月になるとオランダの製油所の技術調

査団約百名が来た。この調査団を見て、捕虜として彼等を製油所内部で使わなくてよかつたと思つたことであつた。

昭和二十一年三月になると、英海軍の特務艦三隻からなる約一五〇名の海兵隊が進駐して来たが、その当時はすでにインドネシアの独立運動が激しくなる一方で、警備は依然として日本軍にゆだねられていた。

続いて八月には本格的英国陸軍部隊が進駐して来て、ここに初めて警備の交代が行われたが、製油所内の保守は日本側の責任であつた。

進駐して来た英国陸軍部隊は英国自慢の精鋭部隊で、先にインパール作戦に勝ち抜いて来たインド兵を交えた混成部隊であつた。我々に直接接触したのは英国兵であつた。この兵達は軍規も厳しく一兵にいたるまで戦勝国とは思えないほど物静かで礼儀も正しかつた。私の宿舍が彼等の宿舍と隣り合つていたのでよく紅茶やチョコレートをもつて遊びに来たが、決して室内には入つて来ず、むしろ友好的でさえあつた。

ある時、一人の兵が他の兵にこの男は日本軍に射た

れて負傷したんだといったのに対し、その兵の言うのには「弾に当って負傷したが、誰が射ったか見えなかった」と笑っていた程であった。

これに引きかえオランダ兵の質は最低であった。このオランダ兵の警備下におかれた日数の少なかったこととは幸であった。

日本人の引き揚げも一段落し、また製油所の引き継ぎも無事完了したのは十月の末であった。残存の少数の日本人も帰還を待つのみとなり、全員がバグストゥン地区へ移動した。

移動して数日後の十一月一日に連合軍からの命令で一製から私、今津、小出、小野口、および二製から青木、伊集院、石郷岡の計七名がブラジューのブラックキャンプに収容されることとなった。

十一月六日に「杉丸」という五〇〇トン位の小船に乗船、サバン島のブラックキャンプに送られたのであるが、我々が「杉丸」に乗船する時、遙か遠くバグスクニンの栈橋から製油所の残留部隊がハシケに乗り移るのが望見された。それと判った時にはもうこれでパ

レンバンには思い残すことはなくなったと安堵の思いであった。

十一月下旬にサバン島に上陸、直ちにブラックキャンプに入った。このキャンプにはジャワ、スマトラ、ボルネオ等から送られて来た戦犯容疑者で我々を入れて約七〇〇名がいた。食料も僅少で重労働にかり出され辛い毎日であったが、この連中の中から後日多数の刑死者が出たと聞く。自らが犯した罪にあらず、ただ悪いめぐり合わせと心から冥福を祈って止まない。

サバン島ブラックキャンプ

今日になって考えて見ると別に大して苦しかったとも思われないが、当時は戦犯容疑者という肩書があっただけに何か締めつけられるような圧迫感の毎日であった。

サバン島は、スマトラ島の北端にある小さな島で、戦犯容疑者の収容所であった島である。

私は、この島に容疑者として四カ月の日時を過ごし、得難い経験をした。したがって、強烈な印象が残っている。

まずこの島の大略を説明すると、この島の大きさは縦約六〇キロ、横四〇キロくらいのものであつたろうか。この島は山が多く、また全島ヤシ林といえるほど多くのヤシの木が栽培されていた。

戦争中は、日本海軍の基地として使われていた。港は深く袋状で自然の良港をなしており、町には大きな鉄工所もあつた。また山上の盆地には、飛行場もあり全島が要塞化されていたため、山の要所には砲台があり、また高射砲陣地もあつた。弾薬庫もあり、数十カ所に爆弾や魚雷の隠匿貯蔵所があつた。これらの処分が、我々の四ヵ月間の主要な仕事になつた。

この島は、このように重要な役割を持ちながら、敵の攻撃はそんなに受けていなかった。わずかに港内の小さな油タンクを焼いた程度だつた。

土地の住民はインドネシア人と支那人で、海軍の宣撫工作が良かったせいか、日本人に対する感情はよく、我々に対してはむしろ同情的であつたので、短かつたとはいえ、我々のキャンプ生活の支えであり、またなぐさめでもあつた。このことに対しては今でも感謝し

ている。

そもそも我々は、何のためにブラックキャンプに入れられたのか、その理由も知らされず進駐軍の命令のままブラジューのブラックキャンプ（それも自分等が作つたもの）に入れられ、行先も知らされないまま「杉丸」という船に乗せられたのであつた。

前にも述べた「杉丸」は五〇〇トンばかりの貨物船で、ジャワからの帰還者を乗せていた。シンガポールでこれらの人々を降ろし、同時に病氣であつた今津氏は病院に入るため下船した。

したがって後に残つたのは、三菱石油の青木、伊集院および新潟鉄工の石郷岡、それに日石から小出、小野口、小倉の計六名とパレンバンから同時に乗船した容疑者で、計三〇名となつた。

シンガポールを立つ時に、うすうすサバン島らしいということが分かつた。途中メダンに寄港しただけで、サバン島へ直行した。十一月十九日に入港したが、一夜を船で過ごし翌朝上陸した。荷物はトラックでキャンプまで運ばれたが、我々は歩いてキャンプに向かつ

た。どのくらい時間がかかったか確かではないが約一時間はかかったように思う。

このブラックキャンプは、海岸近くに建てられていた。海岸とその周辺一帯は、珊瑚礁で白い珊瑚砂が目まばゆいくらいであった。この海岸に続く平地に囲いが出来ていてその中に三棟の建物があった。囲いは嚴重な有刺鉄線の柵で二重にできていた。出入口の一方所に衛兵所があり、重機関銃がキャンプの方向に向けてすえ付けられていた。周辺の小高い丘の上には銃をもった見張りの衛兵が四六時中がんばっていた。この建物の一つは炊事場と水浴場と便所になっていて、他の二棟の内一棟は将校、高等官の住居用であり、他の一棟は下士官、兵となっていた。

将校、高等官用の居住区域は、割合にゆったり取ってあったが、下士官、兵の方は三段の蚕棚になっていてずいぶん窮屈に出来ていた。

仕事は強制労働であり、朝八時にトラックに積まれて出て行き、帰りは四時に仕事をしまつてトラックで帰った。キャンプに帰ると水で体を洗うが、一人当り

手桶に二杯ずつしかくれないので、よほど要領よくやらないと足りなくなつてしまう。

この水浴が終わると食事であるが、三度が三度皆同じドロコンコである。その内容は米少々、コンビーフ大缶一缶（六〇人分）、イワシ缶小缶（八人分）、これに野生のカンコン。日本軍の残していった乾燥野菜、乾燥イモ、大豆、調味料としては塩と粉ミンソが加えられている。いわゆる雑炊であるがこれはとうてい食べられたものではないので、これにタピオカの粉を入れてドロツとなるくらいにする。これと呼んでドロコンコと称した。これが不変の三度の食事であった。

総員約七〇〇名で内朝鮮人が一〇〇名位いたが、日本人と朝鮮人とはこんな環境の中であつたのでお互いに喧嘩もしなかつたが、その立場が違つていただけに日本人を見下ろしたような感じを受けた。その間の事情を察しオランダ軍においても、居住区は別にし、同じ仕事を一緒にさせるようなことはしなかつた。

労働は将校、高等官と下士官以下とは別であつたので一緒に仕事することは少なかつた。

食事は前述のようなもので栄養の不足は当然であつたが、どこへ行つてもヤシの木があつたのでその実を食べて栄養の補給が出来たことや、割合に短期間であつたことなどから栄養失調にもならずすんだのは幸いであつた。

タバコの配給は、小さな葉巻タバコが時々あつたので充分とはいえないがモク拾いだけはやらすんだ。しかも、住民感情が良く、住民の厚意により労働に出た折に多少の余徳のあつたことも確かであつた。

ここにいた四ヵ月間の仕事は、主として将校、高等官は六〇キロ爆弾、魚雷、および砲弾を山から運び下し、伝馬船に移して海上に捨てることであつた。この仕事は皆の羨望的になつた。それは炊事掛の現地人の計らいで日本人の手伝いにも軍人と同じ食事が支給されるからであつた。

四ヵ月間の内で一番気味の悪かつたのは「面通し」であつた。ある容疑者を探すために行うもので、全員を一列に並べてその前を通つて顔を見ながら犯人をさがすことで、自分ではやましいことはないとは思いな

がらも前を通過するまでの時間の長いことといつたらない。誠にいやなものであつた。

ただし無事に日がたち、三月三日にこのキャンプの解散命令が司令部から出た。不幸なことには帰国出来るのは全員ではなかつた。その内の約一〇〇名はその容疑が晴れなかつたのであろうか、メダンの監獄へ移されることになつた。

三月三十一日に待望の帰還船に乗船し、途中メダンに寄港し、気の毒な約一〇〇名の者が下船させられたが気の毒で見えていられなかつた。

なおパレンバンにも寄港し、残留していた部隊長以下将校が乗船してきた。船上からなつかしのプランジュー製油所が見え、第二トッパーに火の入っているのが見えた。

一路、タンジョンプリオクに向い入港したのは四月十日であつた。タンジョンプリオクはジャカルタの郊外にあり、ジャワ全島の帰還者のためのトランシット・キャンプがあつた。

このキャンプは大きな施設で、最盛期には数万人を

収容したといわれたほどであったが、我々が最後とのことで、合計二〇〇〇名しか集まっていなかった。なかなか帰還船が来ず、その間多少の軽労働はあったが、それ程つらいものではなかった。

ようやくにして「熊野丸」に乗ったのは五月六日のことであった。この「熊野丸」は仮装航空母艦で飛行甲板があった。帰還船に改造され、その収容能力は四〇〇〇名とのことであったが、今回は全員で二〇〇〇名しか乗船しなかったため、船内生活は楽であった。

何よりおいしかったのは日本の白米で、五年振りのこの味は日本を思い出すのに充分であった。それにもましてうれしかったことは、監視のいない自由が得られたことであった。

この船は途中バリックパン沖に一時停船し、数名を収容して一路日本に向い、五月十六日に佐世保に入港し直ちに上陸したが、その際頭からいやというほどDDTをぶっかけられて宿舎に入った。

宿舎にかけてあった戦災被害区域地図を見ると東京のほとんどが焼けており、帰るに家なき有様に見受け

られたので、焼け跡やら会社やら知る限りの所へみんな電報を打ち、無事帰還を知らせたものであった。こうして元気にしておられるのも不思議のような気がしてならない。

玉砕の島テニアン戦記

京都府 渡辺 達雄

私は私だけが知っている私の体験したテニアン島での戦闘の様子を書き残したいと思います。でも四十数年の歳月は記憶を薄くし判断のつきにくい事柄もあります。日時、人名などでもし間違っていることがあればお許し下さい。

一、出 征

昭和十八年七月名古屋で編成された誉兵団第四十三師団一三五連隊の我々は、昭和十九年五月八日深夜防諜のため靴音を忍ばせるようにして名古屋城天守閣の下の中隊第二部隊の兵舎を後に、名古屋駅より横浜港